

天声人語

き俺は歩き出す）。夏には「雨蛙」今年はどこが飢えるやら）。飢えにとことん痛めつけられた人の、悲痛な体験が透けて見える▼代表作でアニメ映画になつた「火垂るの墓」は体験に基づいている。終戦の年、神戸空襲で家を焼かれ、幼い義妹と福井県へ身を寄せた。だが妹はやせ衰えて栄養失調で死ぬ。小さな遺体を田んぼの中の石のかまどで茶毬に付した▼指の先ほどの骨しか残らなかつたそうだ。句中の「雨蛙」は、青い水田からの連想であろうか。「戦争で、最もひどい目に遭うのは、子供たちだ」。戦後70年だったこの夏、本紙への寄稿をそんな言葉で結んでいた▼野坂さんが85歳で亡くなつた。直木賞作家というのがわかりやすい肩書だが、縦横自在な顔があつた。作詞家にして黒メガネの歌手。雑誌編集長。参院議員。新潟で選挙に立ち田中角栄氏に挑んだこともある▼根っこにあつたのは、昭和ひとけた世代の反骨心と正義感であろう。一面の焼け野原から僕らのすべては始まつたと言い、まだ足は焼け跡に置いたままのつもりだと語っていた。型破りと過激が絵になる人だった▼空襲に焼かれた後の日、妹を背負つてよく見入つた螢の群舞が忘れられないと書いていた。以来、自分は唱歌「螢の光」を歌えないと。世界の今を憂えながらの、旅立ちだったに違いない。

2015 · 12 · 11